

丁寧形基調の文章における従属節の普通形述語の出現要因 —「から」節を例として— 鏡耀子

従属節の述語の文体は、基調の文体と統一されるとは限らず、基調が丁寧形の文章中であっても普通形になる場合がある。これまでの文法研究において、主節に対する従属度が高い場合に普通形になるということが指摘されてきたが、具体的にどのような場合に従属度が高くなるのかという点が不明瞭であった。また、文末の丁寧形と普通形の交替を扱ってきた文章・談話研究の視点も取り入れて検討すべきであると考え。そこで本発表では、丁寧形と普通形が同程度の割合で使われる「から」節を取り上げ、丁寧形基調の文章において「から」節の述語が普通形となっている例を調査し、それらがどのような例であり、なぜ普通形となっているのかについて検討した。

その結果、普通形述語が現れる例としては、次の9つのものが挙げられることが分かった。①「から」節が間接引用節内に生起している。②「から」節の直後に「だ」が生起する。③「から」節の直後に「こそ」が生起する。④「から」節の外側に「のだ」が生起する。⑤「から」節の述語がイ形容詞または助動詞「ない」である。⑥相手との距離を縮めることを縮めることを狙いとしている。⑦相手をぞんざいに扱っている。⑧言葉遣いが丁寧でない。⑨同一文章中に、主節が一時的に普通形にシフトしている文がある。そしてこれらの例においてなぜ普通形述語になるのかという点については、①から⑤は文法研究の観点から、⑥から⑨は文章・談話研究の観点から説明できる。本発表では前者を「統語論的側面」、後者を「語用論的側面」とする。従属節の述語の丁寧さの問題は、このように文法研究と文章・談話研究の交わるところに存在するため、その双方の視点から検討することが必要である。それによって、従属節の文体の有りようが分かるとともに、それぞれの研究領域に寄与するところがあると考え。